

小学校生活科教科書の活用に関する一考察

A Consideration of the Actual Use of Living Environment Studies Textbooks in Japanese Elementary Schools

加藤 智 (Satoshi Kato)

1 本研究の目的と意義

授業と教科書（正確には「教科用図書」）は密接な関係にある。教科書は児童生徒全員に平等に配られる。学校教育法第34条には、「小学校においては、文部科学大臣の検定を経た教科用図書又は文部科学省が著作の名義を有する教科用図書を使用しなければならない。」と述べられており、教科書の使用が義務付けられている。それゆえに、教科書は児童生徒が新しい知識や技能を習得するためのみならず、教師が授業計画を立てる際の重要なリソースともなっている。

生活科は1989（平成元）年改訂の小学校学習指導要領において、小学校第1学年及び第2学年に新設された、具体的な活動や体験を通して学ぶ教科である。学習材は学校や家庭、地域に存在する。児童自身は、学習主体であると同時に学習対象でもある。このような特質をもつ生活科において、教科書は必要なのかという問いは、生活科創設期から投げかけられていた。岩本ら（1997）は、1996（平成8）年に改訂された生活科教科書の掲載内容を分析する中で、「『生活科にとって教科書はどうしても必要なのか』という疑問は、ますます深まってしまった。」（p.159）と、生活科教科書に対する否定的な見解を述べている。また、朝倉（2017）は、生活科教科書の必要性を指摘しながらも、「生活科では、児童が思いや願いを実現していく。その過程で具体的な活動や体験を通して、身近な人々、社会及び自然と自分との関わりなどを学んでいく。現物や現場の現実から離れて生活科は存在しない。生活科は教科書の内にはなく、教科書の外にある。そういう教科に教科書は必要なのか。」（p.67）と問題提起している。一方で、上之園（2017）は、「生活科教科書は、児童にとっても教師にとっても、活動を見通し、主体的な学びにつながる授業の具体的なモデルになっている。生活科の教科書は、現在『生活科教科書で児童と教師が共に学ぶ』役割を果たしているといえよう。」（p.71）と生活科教科書の有効性を指摘している。

生活科が誕生して約30年余りが経過し、生活科は小学校の教科としてすっかり定着したと言える。しかし、生活科の授業における教科書の位置付けや活用の在り方については、十分な理解が得られているとは言い難い。このような状況を踏まえ、本研究は、生活科教科書やその活用の実態について明らかにするとともに、生活科の授業における教科書の効果的な活用の在り方について若干の提言をすることを目的とする。

2 先行研究

生活科教科書に関する先行研究を概観すると、その内容の分析に関する研究が多くを占め、例えば、飼育動物に関する内容の比較分析に関する研究（岩崎，2023；小林，2020），理科教育・科学教育とのつながりを分析する研究（竹中・辻，2022），デジタルコンテンツの活用の現状に関する研究（山崎・雨森，2023），アメリカザリガニ等の外来生物の扱いについて分析する研究（土井，2020；比嘉，2019），遊びの配置と内容の変容を分析する研究（福元，2018）などがある。また、海外の生活科に関連する教科の教科書との比較分析（栗原，2018；原田，2012），教科書採択における選定委員会の報告書に関する調査研究（熊谷，2021）なども存在する。

一方で、生活科教科書の活用に関する研究は限られている。その中に、かなり古くなるが、増本・天笠（1994）の「生活科の受容過程に関する研究（4）—教科書使用の実態調査をもとにして—」がある。この研究は、1992年10月に実施された質問紙調査に基づき、当時誕生してまだ日の浅い生活科が、学校教育においてどの程度受容されているかについて、教科書使用の実態から明らかにしようとするものである。この研究では、生活科教科書を不要と考える教師が存在する一方で、教科書が授業づくりに一定の役割を果たしていることが明らかとなっている。

このように、生活科教科書の記述内容を分析するものやその変遷を追うもの、海外との比較をするもの、教科書採択の実態を明らかにするものなど、多種多様な研究が行われているが、生活科教科書の活用に関する研究は限られており、特に近年はほとんど見られないことがわかる。

3 本研究の方法

本研究の目的を達成するために、本調査では、生活科を担当する教師に対する質問紙調査を実施し、生活科教科書の活用に関して、増本・天笠（1994）の研究結果と比較することで、生活科が誕生してから約30年経過した現在、生活科教科書が教師にどのように受け止められているのか、生活科教科書の存在が指導内容や教師の意識にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにする。

調査期間は2022年7月から8月とした。調査対象は、これまでに生活科の授業を担当したことのある小学校教師であり、筆者が各地の講演会や研修などで協力を依頼し、同意が得られた104人である。Webアンケートを活用して回答を求めた。調査対象の教師の性別は男性35人（33.7%）、女性69人（66.3%）である。また、年齢層については、20代が34人（32.7%）、30代が30人（28.8%）、40代が22人（21.2%）、50代が12人（11.5%）、60代が6人（5.8%）である。そして、調査対象の教師が所属する地域は、愛知県48人（46.2%）、大分県14人（13.5%）、宮城県13人（12.5%）、京都府7人（6.7%）、東京都5人（4.8%）、埼玉県3人（2.9%）、兵庫県・神奈川県・青森県・千葉県2人（各1.9%）、奈良県・愛媛県・北海道・滋賀県・大阪府・岩手県1人（各1.0%）であった。また、使用されている生活科教科書（令和2年度版）は、A社55人（53.9%）、B社20人（19.6%）、C社10人（9.8%）、D社7人（6.9%）、E社（5.9%）、F社3人（2.9%）、G社1人（1.0%）であった。

なお、増本・天笠（1994）の研究では、本調査の30年前にあたる1992年に同様の調査を実施している。この研究では、対象地域が千葉県内に限定されており、調査対象が大きく異なるため、単純な比較はできないが、当時の調査では、調査対象の教師102人の性別は、男性が10人、女性

が 90 人である。また、年齢層については、20 代が 20 人 (19.6%)、30 代が 53 人 (52.0%)、40 代が 24 人 (23.5%)、50 代が 4 人 (4.0%)、不詳 1 人 (1.0%) となっている。

今回の調査対象は、増本・天笠 (1994) の調査対象よりも男性教師の割合が大幅に増えている。統計的なデータはないものの、かつて小学校低学年の担任は、女性教員が圧倒的に多かったことは、一般的な認識として多くの人に受け入れられていると考えられる。その一方で、近年は小学校低学年を担当する男性教師が増えていることが、本調査のデータから示唆されている。また、年齢層に着目すると、増本・天笠 (1994) の調査対象は 30 代が半数以上を占めているが、今回の調査対象では、20 代が最多となっている。生活科を指導する教員の年齢層が若年化していることが読み取れる。繰り返しになるが、調査対象が限定されているため、このデータをもって全国の小学校における生活科を担当する教師の実態を示すものと断言することはできない。しかし、ここで示されているデータは、小学校教育に関わる多くの人々にとって、感覚的に納得できるものであると考えられる。

また、増本・天笠 (1994) は、調査対象に対して、指導を得意・苦手とする教科等について尋ねている。本調査も同様の質問をしているのでここで確認をしておきたい。図 1 は、増本・天笠 (1994) の研究において示された結果であるが、「指導が苦手」との回答は、生活科は 44.1% と道徳に次いで 2 番目に多い。

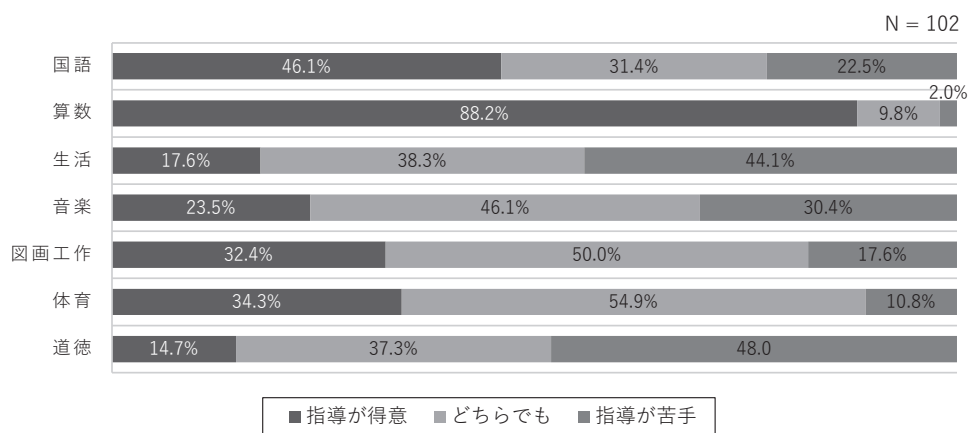


図 1 指導を得意・苦手とする教科等 (増本・天笠, 1994, p.110 を基に筆者作成)

本調査の結果は図 2 の通りである。4 件法で回答を求めているため、図 1 との単純な比較はできないが、「得意」「どちらかといえば得意」と「どちらかかといえば苦手」「苦手」に分けると、指導が苦手と回答された教科等については、音楽が 63.3% と最も多く、次いで体育 (52.8%)、道徳 (51.0%) となっている。生活科は 43.3% で 5 番目であり、「得意」との回答 (56.7%) の方が「苦手」を上回っている。生活科が誕生して年月が経過して定着したことに加え、小学校時代に生活科を経験した若手教師が増えていることもあり、近年は生活科の指導に対する特別な苦手意識をもつ教師が減っていることがうかがえる。

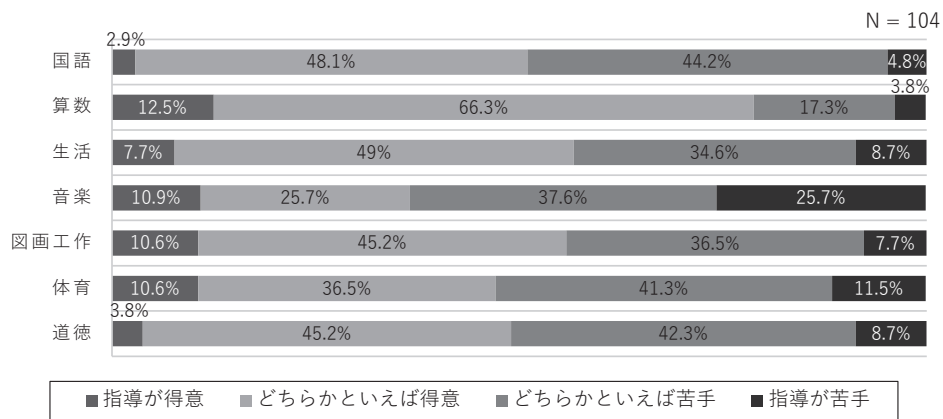


図2 指導を得意・苦手とする教科等（2022年）

なお、本調査で対象となる生活科教科書を刊行する教科書会社は、質問紙調査によって回答があった、A社、B社、C社、D社、E社、F社、G社の7社とする。令和2年版の生活科教科書を発行している出版社は8社あるが、本研究で対象とする7社の教科書の採択率を合わせるとほぼ100%となることから、本研究の対象は、全国的な生活科教科書の使用状況を探るうえで有効と言えよう。

4 研究結果と考察

(1) 生活科教科書の使用頻度

図4は、生活科教科書の使用頻度について、生活科の指導が得意（「得意」あるいは「どちらかといえば得意」）と回答した教師群と、苦手（「苦手」あるいは「どちらかといえば苦手」）と回答した教師群に分けて示したものである。増本・天笠（1994）も同様の調査を実施しているため、並列して示している（増本・天笠（1994）は、生活科の指導を「指導しやすい」教師群と「指導しにくい」教師群に分けている）。

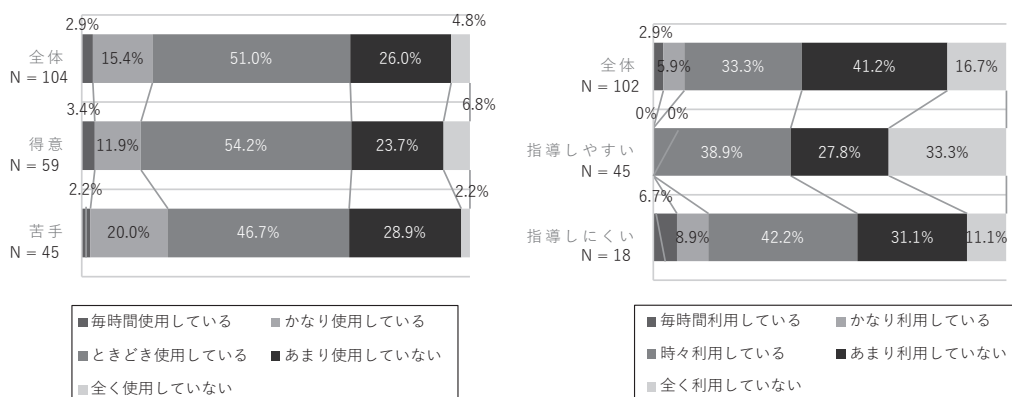


図3 教科書の使用頻度と生活科の指導が得意・苦手

（左は2022年に筆者が実施、右は増本・天笠，1994，p.111を基に筆者作成）

全体の傾向から見ると、増本・天笠（1994）の調査では、生活科教科書を「あまり利用していない」あるいは「全く利用していない」と回答した教師は 57.9% に上るが、本調査では 30.8% にとどまっている。この割合は、生活科の指導を得意と回答した教師の群でも苦手と回答した教師の群でも大きな違いは見られない。かつては生活科教科書の使用に消極的な教師が半数を超えていたが、近年は生活科教科書のある程度活用する教師が増えていることが読み取れる。なお、冒頭で述べたように、教科書を使用することは義務付けられている。生活科教科書を使用しないことの是非については、別に議論すべき問題であるため、本稿では論じないこととする。

さらに詳細に検討するために、本調査において、生活科指導を「得意」あるいは「苦手」（いずれも「どちらかと言えば」を含まない）と回答した教師の群に限定して、生活科教科書の使用状況を分析した。その結果が図 4 である。

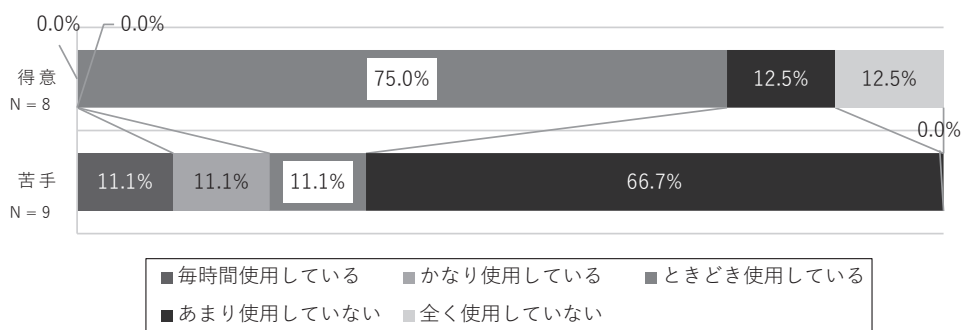
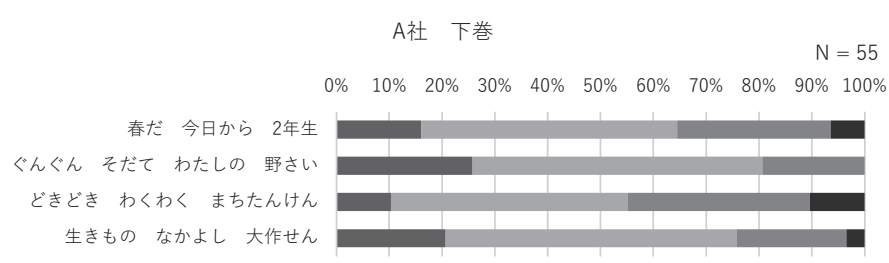
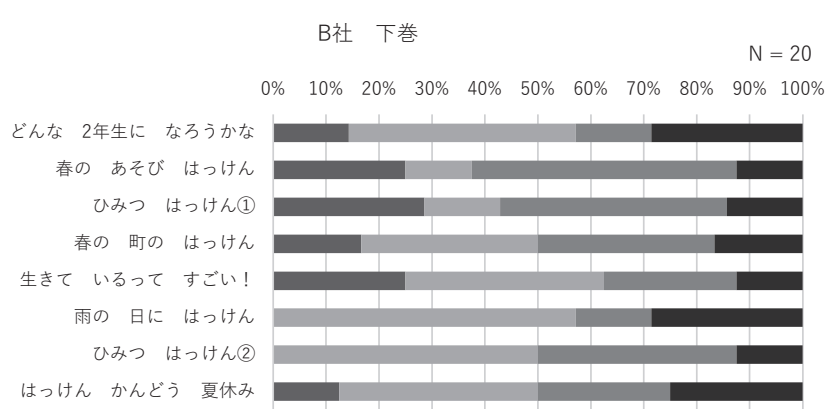
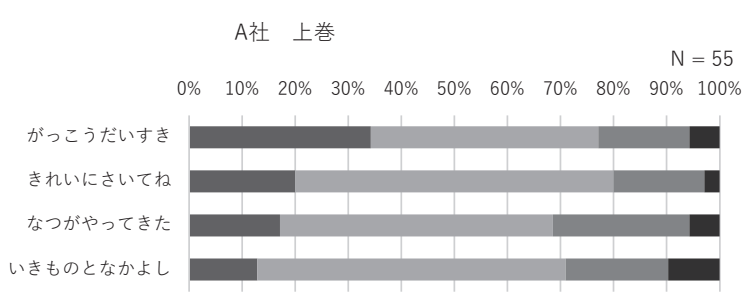
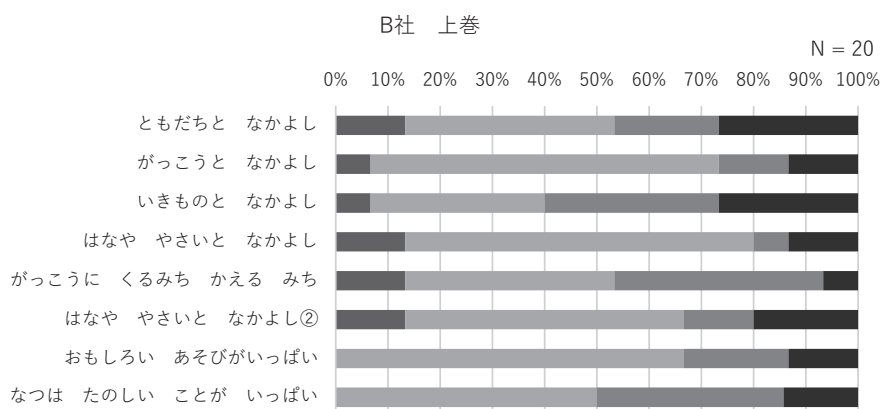


図 4 教科書の使用頻度と生活科の指導の得意・苦手

回答数が限定的であるため、データの正確性には一定の制約があるものの、生活科の指導が「苦手」と明確に回答する教師に限ると、教科書を「あまり使用していない」との回答が最も多いことがわかる。生活科の指導が苦手という自覚があれば、積極的に教科書に頼った授業が展開されることが想定されるが、この点については、後の質問紙の項目とも関わってくるため、後に改めて考察する。

(2) 単元における生活科教科書の使用状況

続いて、各単元における生活科教科書の使用頻度について調査した結果を示す。各教科書会社が公開している年間指導計画に基づき、どの単元において生活科教科書を使用したか、4 件法（「よく使用した」「ときどき使用した」「あまり使用していない」「全く使用していない」）で回答を求めた。なお、調査実施期間が 7 月から 8 月であったため、一学期に想定されている単元のみについて回答を求めた。ここでは、十分な回答数の集まった A 社と B 社の 2 社の生活科教科書を対象とする。その結果が図 5 である。なお、生活科教科書には、1 年生用、2 年生用が刊行されており、それぞれに正式な書名があるが、本稿では上巻（1 年生用）、下巻（2 年生用）として表記する。



■よく使用した ■とぎどき使用した ■あまり使用していない ■全く使用していない

図5 単元ごとの教科書の使用頻度

まず、使用頻度の高い単元に注目したい。「よく使用した」「ときどき使用した」の合計値が60%に達した単元は、B社上巻の「がっこうと なかよし」(73.3%)、「はなや やさいと なかよし」(80.0%)「はなや やさいと なかよし②」(66.7%)「おもしろい あそびがいっぱい」(66.7%)、A社上巻の「がっこうだいすき」(77.1%)、「きれいにさいてね」(80.0%)、「なつがやってきた」(68.5%)、「いきものとなかよし」(62.9%)、B社下巻の「生きて いるって すごい！」(62.5%)、A社下巻の「春だ 今日から 2年生」(64.5%)、「ぐんぐん そだて わたしの 野さい」(80.0%)、「生きもの なかよし 大作せん」(75.9%)の11単元である。11単元のうち、8単元が動植物の栽培・飼育に関する単元である。植物の栽培方法や生き物の飼育方法に関して、子どもたちに分かりやすくイメージさせるための補助として、教科書を用いていることが考えられる。

次に、使用頻度の低い単元に注目する。「よく使用した」「ときどき使用した」の合計値が50%に満たない単元は、B社上巻の「なつは たのしいことが いっぱい」(50.0%)、「いきものと なかよし」(40.0%)、B社下巻の「春の あそび はっけん」(37.5%)、「ひみつ はっけん①」(42.9%)であった。季節や身近な生活に即した単元に使用率の低さが見られる。また、B社上巻「いきものとなかよし」とA社上巻「いきものと なかよし」の単元に関して、同じく飼育を扱う単元であるが、使用率はB社上巻「いきものとなかよし」が40.0%、A社上巻「いきものと なかよし」が71.0%と、その使用頻度には約30ポイントの差がある。紙面を見比べると、B社上巻「いきものとなかよし」は2ページのみ扱いであり、掲載されている動物の種類は6種類であった。一方で、A社上巻「いきものと なかよし」は9ページの紙面を割いており、昆虫と哺乳動物を中心とする紙面で構成されている。掲載されている動物は昆虫が14種類(バッタやコオロギなど)、哺乳動物が2種類(ウサギやハムスター)である。また、B社では哺乳動物に重点が置かれているのに対し、A社では昆虫に重点を置いている。また、両者の教科書では、説明の量に大きな違いが見られる。B社では「うさぎの抱き方」についての説明が掲載されているが、動物の具体的な飼育方法についての記載はない。一方で、A社では、採集の場面(昆虫を探す絵が掲載されている)が掲載されていたり、飼育方法についての詳細な説明がなされていたりと、その扱いには大きな違いが見られる。この違いが、生活科教科書の使用の有無に影響を与えている可能性は十分に考えられる。

また、学年別で使用率を比較すると、2年生より1年生の方が教科書の使用率が高いことが読み取れる。このことは、児童の発達段階の違いによるものなのか、あるいは単元の特性によるものなのか、その要因ははっきりしないが、2年生の児童であれば生活科の学習経験を積み重ねていることから、教科書に頼らない授業展開が構想されている可能性は十分に考えられる。

(3) 指導場面における生活科教科書の使用状況

図6は、教師が生活科教科書を授業のどの場面で使用しているのかを表したものである。「導入」場面で教科書を使用する割合は約8割に上っている。「展開」や「まとめ」の場面での使用率は2割程度であった。生活科教科書が、全体的に「導入」の場面で使用されていることがわか

る。例えば、先述の各単元における生活科教科書の使用状況を踏まえると、「はなやさいとなかよし」や「きれいにさいてね」、「ぐんぐんそだてわたしのやさい」などの授業では、導入の段階で植物や野菜を育て始める前のイメージを膨らませるためや、育て方のヒントを得るために教科書を参考資料として用いている可能性が考えられる。

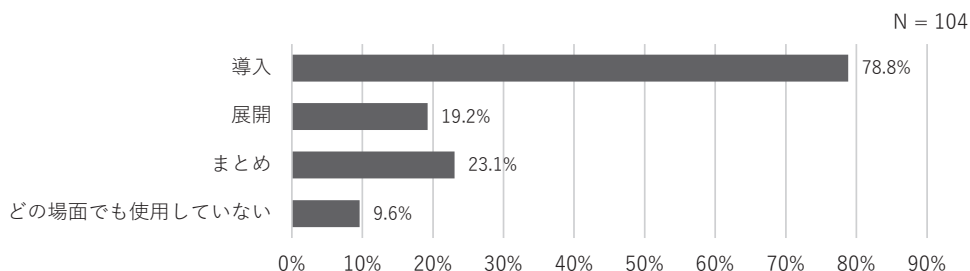


図6 指導場面における生活科教科書の使用状況（複数回答可）

(4) 生活科教科書に対する評価

生活科教科書について、教師はどのように受け止め、評価しているのか。図7は生活科教科書に対する評価を整理したものである。それぞれの質問項目について、「増やしたほうがいい」「ちょうどいい」「減らしたほうがいい」の3段階で回答を求めた。

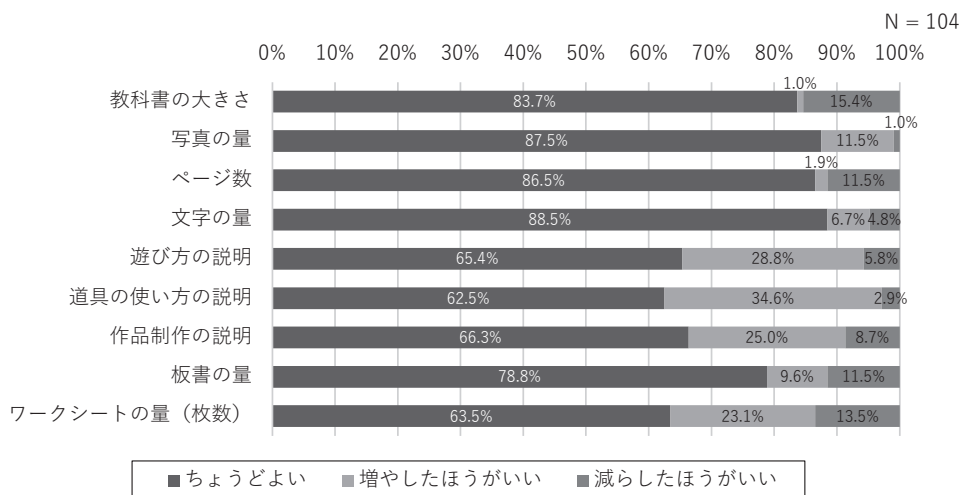


図7 生活科教科書に対する評価（全教科書会社）

すべての項目において、「ちょうどいい」が6割を超えていることから、現状の生活科教科書に対する満足度は決して低くないことが読み取れる。一方で、「遊び方の説明」「道具の使い方の説明」「作品制作の説明」「ワークシートの量」に関しては、「増やしたほうがいい」との回答が2割を超えている。また、「板書の量」については、「増やしたほうがいい」と「減らしたほうがいい」の回答がほぼ同程度である。

より詳細に検討するために、A社とB社の2社の生活科教科書への回答に絞って分析する。

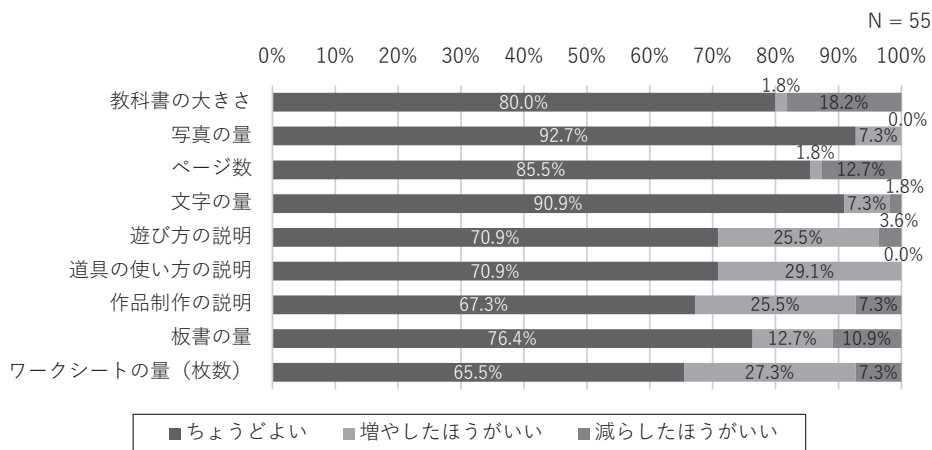


図8 生活科教科書に対する評価 (A社)

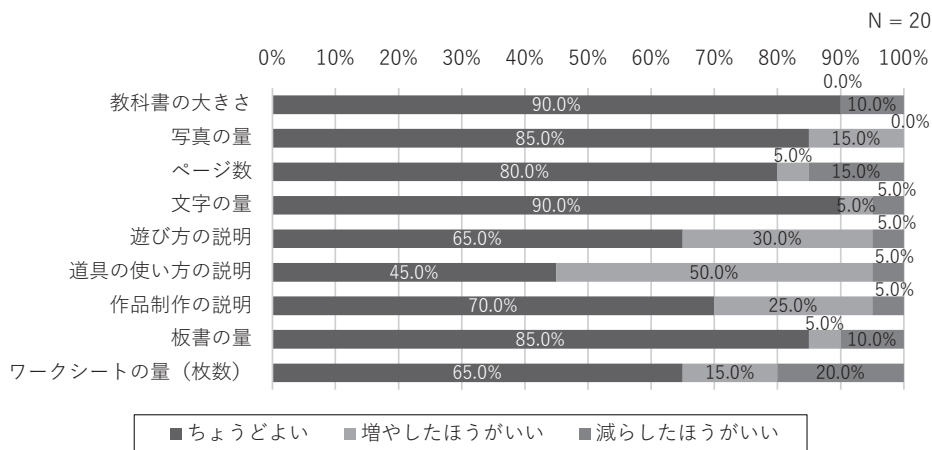


図9 生活科教科書に対する評価 (B社)

「道具の使い方の説明」については、B社で「ちょうどいい」と回答した割合が45.0%であり、教師の半分以上が改善を求めていることがわかる。「道具の使い方の説明」については、A社は上巻、下巻それぞれで掲載しているが、B社では上巻のみの掲載となっていることが、この結果に表れていることが考えられる。また、「作品制作の説明」および「遊び方の説明」については、A社、B社ともに25%程度の教師が「増やしたほうがよい」と回答している。全体を通して、ものづくりや製作活動に関して、紙面を割いてほしいという要望が高いことがわかる。

「ワークシートの量 (枚数)」については、A社で27.3%の教師が「増やしたほうがよい」と回答している。この値は、B社(15.0%)に比べて多い。この結果を受けて、それぞれの生活科教科書において掲載されているワークシートの量(枚数)を調査した。その結果は表の通りである。いずれも、B社の方が多くのワークシートを掲載していることがわかる。授業のイメージをもつ上で、教科書のワークシートが手がかりとなっていることがうかがわれる。

表 生活科教科書に掲載されているワークシートの量 (枚数)

生活科教科書	ワークシートの量 (枚数)	生活科教科書	ワークシートの量 (枚数)
A社 上巻	23	B社 上巻	27
A社 下巻	16	B社 下巻	26

(5) 生活科教科書の必要性

生活科教科書の必要性について、「必要」「どちらかといえば必要」「どちらかといえば不要」「不要」の4段階で回答を求めた。その結果が図10である。約9割(88.5%)の教師が生活科に教科書は必要であると回答した。今回の調査において、生活科教科書が一定の支持を得ていることが今回の調査で明らかとなった。多くの教師にとって、生活科教科書が受け入れられると同時に、授業づくりの参考にされていることが読み取れる。

「必要」「どちらかといえば必要」と回答した理由について、自由記述で回答を求めた。

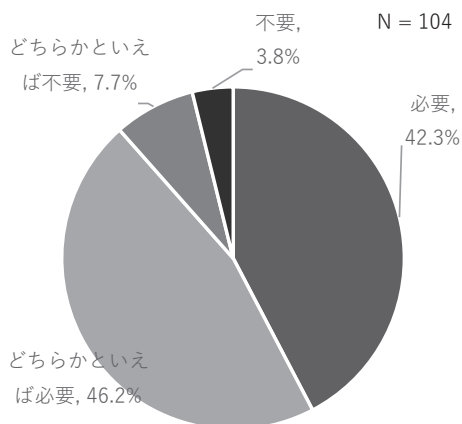


図10 生活科教科書の必要性

- ・ 初めての1年生なので、教科書がないとどのように授業を進めていけばよいのか見通しが持ちづらい。
- ・ 初めて生活科の授業を担当し、教科書があることで年間の見通すことができ、取り組みやすいため。
- ・ 目指す姿が適度にみえやすくなっていて、子どもというよりはむしろ若手など生活科の学びがわかっていない教職員に有効だと考えます。
- ・ 若手や初めての先生、苦手意識を持つ先生には必要
- ・ 子どもが活動で悩みを抱えたタイミングで見ると、ヒントとなるものだから。
- ・ 児童が誌面で見ると、容易に学習内容が把握できる利点がある。
- ・ 何が始まるんだろう、と子供も楽しみにしている。
- ・ 教科書の挿絵や写真等、導入で見せてから授業に入ると、授業内容や今後の展開などが児童にとってイメージしやすくなるから。
- ・ 低学年は言葉だけじゃ伝わらないことが多いから、絵や写真があると意味が伝わるし、観察の言葉なども自然に覚えるから。
- ・ 写真や実践例等の資料を提示するのに便利だから。
- ・ 目的やねらい、ポイントを確認するときに使います。また、遊び方や植物の成長の様子を見たりします。
- ・ 教科書の挿絵や写真等、導入で見せてから授業に入ると、授業内容や今後の展開などが児童にとってイメージしやすくなるから。

- ・ 実際の花や虫の説明に使用できるから。また、子どもたちは教科書を見て見通しをもって取り組めるから。遊び方のページも見て、おうちの人と一緒に作るなど、家庭においてもプラスになっていると思う。作り方や遊び方を知らない保護者も多いため、役立っていると思う。
- ・ 実際に見せられないものの写真を手軽に見せることができるから。児童が自分で調べやすいから。
- ・ 写真があるとわかりやすい。雨の日に写真を見ながら授業ができる。

これらの回答から、生活科教科書が、生活科の指導経験の浅い教師にとって、生活科の授業づくりで大いに貢献していると考えることができる。また、生活科教科書が、児童の生活科の学習に対する意欲の向上につながっていることもうかがえる。授業場面においては、生活科教科書の特質である写真や絵が多いこと生かし、資料として活用できる点も評価されていることがわかる。

その一方で、約1割(11.5%)の教師は生活科教科書を「不要」もしくは「どちらかといえば不要」を回答している。その理由は以下の通りである。

- ・ 学校のカリキュラムに合っていないので使いにくい。使いにくいものはよほどのことがない限り使わない。
- ・ 学校や児童の実態に合わせた材との関わりが重要だと考えるため。
- ・ 教科書があることで、その学校や地域特性の授業づくりではなく、教科書ありきの授業展開になっている実践が多いと思うから。
- ・ これまでほとんど使用したことがないため。
- ・ 使い方が分からず、あまり使用したことがないから。
- ・ 教員用の指導書は必要だが、子供は教科書よりも実際に活動を通して学べばいいのではないかと思ってしまうから。
- ・ 教科書の内容を網羅しないといけないという概念が先生方にしみついてしまうから。

これらの理由は、大きく三つに分類することができる。一つ目は、生活科教科書が学校や児童の実態に即していないことである。日本全国のさまざまな地域で使用されることを前提に作られている教科書は、その性質上、地域ごとの特色や実情を網羅することが難しい。教科書に掲載される内容は、一般的で普遍的な事例を選ぶ必要があり、その結果として「最大公約数」的な内容になりがちである。このような状況は、特に生活科のような地域性を重視する教科においては、顕著な問題となる。生活科教科書を使用する際は、このような問題を解決する必要があるだろう。

二つ目は、生活科教科書の使用経験が乏しく、使用法がわからないことである。この点については、先に論じた、生活科の指導に自信のない教師が生活科教科書を使用しない傾向にあることに密接に関連している。生活科は、教科書に沿って授業を進めるだけでは、効果的な授業は実現できない。さらに、生活科教科書には、児童に定着させるべき知識や技能が直接的に掲載されているわけでもない。生活科に関する十分な理解をもたない教師は、生活科教科書の使用に特に困難を感じる事が想定される。逆説的に捉えると、生活科について深く理解している教師ほど、

生活科教科書を効果的に活用できる可能性も指摘できる。

三つ目は、生活科教科書の存在自体が、生活科を指導する教師に「好ましくない」影響を与えることである。生活科教科書の存在が、生活科のカリキュラムを構想する教師の創造性や柔軟性を制限する要因になり得ることは容易に想像できる。そこには、教科書に掲載された内容は網羅しなければならないという教師の固定観念も大きく影響していると考えられる。

生活科教科書を不要とする意見は多数ではないものの、これらの理由についてクリアにしておくことが、生活科教科書の効果的な活用を考える上で重要と言えるだろう。

(6) 生活科教科書に対する要望

生活科教科書について必要性を感じている教師であっても、生活科教科書への改善を求めるコメントがいくつか見られた。

- ・ 写真よりはイラスト多めの方が観察記録しやすい。QRコードを使っての動画を多くして個に対応できると良い。
- ・ テレビに映して使いたいので、デジタル化してほしい。雨の日でも授業できるよう、写真や動画をもっと入れてほしい。
- ・ 図鑑のようにもっと写真があると嬉しいです。
- ・ デジタルコンテンツの不足

これらの要望は、生活科教科書のデジタル化に関するものと分類することができる。教科書という媒体の都合上、掲載できる内容については制限があるが、デジタルコンテンツを充実させることが、生活科教科書の効果的な活用を考える上で重要と言えよう。

- ・ 例が具体的すぎて、子どもがその通りにしかできなかつたり書かなかつたりしてしまうことがある。
- ・ たまに書きすぎ。子どもに考えさせたいときは開かせないようにしないといけない
- ・ 最初に教科書を見てしまうと、子どもに気づいて欲しい部分を先に提示してしまうことになる。

これらの要望は、教科書に掲載されている情報が、児童の思考の妨げになっていることを指摘するものと捉えられる。筆者が調べた生活科教科書の中には、生活科の授業場面における詳細な板書のイラストが掲載されているものがあり、その中には、教師が児童に期待する発言や意見があらかじめ豊富に記載されている。また、別の生活科教科書では、季節の変化について児童が考える場面が掲載されているが、授業において引き出したい児童の意見が、誌面にたくさん記載されている。これらは、生活科教科書の「指導書化」と捉えることができる。生活科教科書が児童の活動や思考を促すことよりも、教師にとっての指導のしやすさが優先されていることが考えられる。

- ・ 重たいので、学校保管にはなる。
- ・ サイズを国語や算数の教科書の大きさに合わせてほしい

これらの要望は、教科書の大きさや重さに関するものである。生活科教科書の大きさは、各教科書会社によって異なるが、近年は大型化が進んでおり、令和2年度版では、最も大きいものでA4判(210×297mm)が登場している。最も多くの教科書会社が採用しているのがAB判(210×257mm)であるが、A4判とAB版の間の大きさの生活科教科書もある(210×278mm)。教科書の大型化は他教科でも進んでいるが、特に生活科では顕著である。小学校低学年という児童の発達段階に加え、資料性が重視される生活科教科書の特徴が要因であると考えられるが、教科書の大型化は重量の増加につながっている可能性がある。

今回の調査では、生活科教科書の保管方法についても尋ねているが、学校で管理していると回答した教師は73.8%に上る。したがって、大半の児童は生活科教科書を家庭に持ち帰っていないことになる。先の自由記述の回答の中に、「遊び方のページも見て、おうちの人と一緒に作るなど、家庭においてもプラスになっていると思う。作り方や遊び方を知らない保護者も多いため、役立っていると思う。」との意見があったが、多くの学校では、保護者が生活科教科書に触れる機会がほとんどないということになる。生活科教科書の有効性を高めるためには、大きさ・重さの問題を解消し、家庭への持ち帰りやすさを改善することが重要である。教科書のデジタル化は、この問題の解決において最も現実的な手段である可能性が高いと言えるだろう。

5 まとめ

ここまで、生活科教科書の活用状況について、質問紙調査の結果を基に分析・考察した。最後に、生活科の授業における教科書の効果的な活用の在り方について若干の提言することで、本稿のまとめとしたい。

経験の浅い教師や、生活科の指導が苦手と感じる教師にとって、生活科教科書は教師の経験の差を埋める役割を果たしている。このことは、生活科の授業の質を保証することにもつながっている。その一方で、生活科教科書の普及が、生活科の授業のパターン化・パッケージ化を促進する可能性も否定できない。教科の本質を理解せずに、教科書に頼った授業が展開されることは、「とりあえず体験や活動をさせればよい」という安易な指導観に教師を引き込む危険性を孕んでいる。このように考えると、生活科の指導を得意と回答する教師であっても、「とりあえず体験や活動をさせればよいから」と思い込んでいる可能性があることも否定できない。「教科書ありき」ではない「児童ありき」の生活科を実現することに注力することが肝要である。

具体的な活動や体験を通して学ぶ生活科において、教科書の必要性を疑問視する声は常にある。具体的な活動や体験を、生活科教科書の紙面をもって代替することはできない。しかし、生活科教科書が、児童の活動や体験を補完する可能性は十分にある。教科書を読むという「間接体験」を効果的に取り入れることで、児童の「実際に体験してみたい」、「もっと詳しく知りたい」といった思いや願いを引き出し(すなわち「直接体験」を動機付け)たり、さらに深い探究の世界に児童をいざなったりすることができると思われる。

生活科教科書は、児童が自己の学習を振り返り、思考を整理するためのツールとして機能する

ことが考えられる。例えば、生活科教科書には活動を振り返るための質問が提供されているものがある。このような質問は、児童の自身の学びを省察し、自己の理解を確認することを促す可能性がある。一方で、生活科教科書が単元の導入で使用されることが圧倒的に多く、展開やまとめで使用されることが少ないことから、生活科教科書の紙面やその活用について、改善の余地があると言えるだろう。

また、生活科教科書は、生活科における児童の学習経験を保護者や家族と共有するための架け橋にもなり得る。現在の小学校低学年の児童の保護者の中には、生活科という教科を経験していない層も少なくない。そのような保護者に対する生活科の学習の意義や価値の理解を高める上で、生活科教科書は効果的なツールとなる。その上では、生活科教科書の持ち帰りや家庭での活用を促進する必要がある、デジタル化の促進が効果的であることは既に論じた通りである。ただし、このことは、単に現行の教科書をデジタルに変換することのみを意味するのではない。家庭環境において教科書を開く動機付けや必要性を生み出すようなコンテンツの設計を行うことが不可欠である。このためには、教科書のデザインや内容を家庭での利用に適した形に再構築し、家庭内での学習やコミュニケーションを促進するような要素を積極的に取り入れる必要があるだろう。

なお、今回の研究では数量調査に限りがあり、全国的な傾向を把握できたとはいえない。今後は、さらに細かいケースを考えるとともに、より多くの数量調査を実施して、生活科教科書の実態や在り方の動きを継続的に把握することを課題としたい。

謝辞 本稿の執筆にあたっては、質問紙調査の集計および分析において、栗本圭太氏（みよし市立中部小学校教諭）に協力をいただきました。ここに感謝の意を表します。

引用文献

- 朝倉淳（2017）「生活科に教科書は必要なのか」中央教育研究所『教科書フォーラム：中研紀要』18, pp.66-68
- 岩崎保之（2023）「小学校生活科教科書における飼育に関する内容の比較分析」関西大学教育推進部教職支援センター『教職支援センター年報』2022, pp.1-10
- 岩本廣美, 櫻本豊己, 鈴木洋子, 谷口義昭, 鳥居春己, 前田喜四雄, 向山玉雄, 増田信一（1997）「生活科における教科書分析の研究」奈良教育大学教育学部附属教育実践研究指導センター『教育実践研究指導センター研究紀要』6, pp.139-161
- 上之園公子（2017）「これからの生活科教科書への期待」中央教育研究所『教科書フォーラム：中研紀要』18, pp.70-72
- 熊谷和彦（2021）「教科書採択における「選定委員会の現状と調査研究」に関する一考察：2020年度使用小学校教科用図書「生活科」「道徳科」の調査研究報告書をもとに」東北福祉大学教職課程支援室『教職研究』pp.1-18
- 栗原清（2018）「日本とベトナムの小学校低学年生活科(自然と社会)教育の現状：授業の手法と教科書分析を通して」学習院大学東洋文化研究所『東洋文化研究』20, pp.202-183
- 小林道正（2020）「生活科の飼育活動における教科書比較調査」全国学校飼育動物研究会『動物

- 飼育と教育』24, pp.12-15
- 竹中真希子, 辻宏子 (2022) 「小学校生活科の教科書における科学」『日本科学教育学会研究会研究報告』36 (4), pp.33-36
- 土井徹 (2020) 「生活科教科書における飼育後の外来種の扱いに関する記述の変遷と現状－アメリカザリガニに関して－」『科学教育研究』44(4), pp.375-383
- 原田信之 (2012) 「科学的な見方・考え方の基礎を養う生活科教科書の日独比較研究：遊びや遊びに使うものの分析を通して」中央教育研究所『教科書フォーラム：中研紀要』10, pp.54-63
- 比嘉俊 (2019) 「教科書における外来生物の扱いに関する調査－小学校生活科, 小学校理科, 中学校理科, 高等学校理科の検定教科書を基に－」『科学教育研究』43 (4), pp.457-467
- 福元真由美 (2018) 「1990～2010年代の生活科教科書における「遊び」の配置と内容の変容：幼児期の教育と小学校教育の接続の観点から」日本保育文化学会『保育文化研究』6, pp.1-15
- 増本朋絵, 天笠茂 (1994) 「生活科の受容過程に関する研究 (4)－教科書使用の実態調査をもとにして－」『千葉大学教育学部研究紀要』42(1), pp.109-119
- 山崎真之, 雨森雅哉 (2023) 「小学校教科書におけるデジタルコンテンツ活用の現状について：「生活科」教科書を中心として」社会・人文研究会『社会と人文』20, pp. 95-108